● ビブリオテーカ ●

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No.19
2023.11

海外の図書館の思い出

国際教養学科
教授 平野　明彦

「図書館は大学の心臓である」という言葉は広く人口に膾炙（かいしゃ）しており，図書館が大学の中心的役割を担っていること，さらに大学にとって不可欠な英知と公的空間の象徴であることに疑問の余地はない。とはいうものの，そこにはまた各人各様の，ある種私的（秘匿的）かつノスタルジックな記憶や思い出が纏わり付いていることも，否定できないだろう。かくいう私も例外ではなく，小中学生の頃から現在に至るまで，図書館で過ごした懐かしい日々は，今なお人生の貴重な財産の一つである。もっとも，それから何年かを経た大学・大学院時代の最良の図書館は大学のそれではなく，下宿近くの行きつけの喫茶店だったのであるが。これまで訪れた大学図書館の中でも，ハーバード大学やヴィーン大学やロンドン大学，さらに北京大学やハワイ大学やハイデルベルク大学など，印象深い図書館は枚挙に暇（いとま）がない。そうした数多くの図書館の中から，ここでは，個人的に特に忘れ難いドイツの2つの図書館とギリシャの図書館の思い出について，少しだけ申し述べたいと思う。

まず，ドイツの大学図書館の思い出から始めよう。もう35年以上前になるが，大学院博士後期課程在学中に，旧西ドイツのマインツ大学（現ヨハネス・グーテンベルク大学）に留学する願いが叶った。当時，音楽・絵画等さまざまな分野においてドイツは憧れの地であり，とりわけニーチェやハイデガーの思索と詩作（Denken und Dichten）を研究しようとしていた一大学院生にとって，二人の大思想家の世界的権威の一人であるヴィッサー（Richard Wisser）教授の下で哲学を学べることは，望外の僥倖と思われた。この頃の教授の主たる関心は，ニーチェ，ハイデガー，ヤスパースに集中しており，この時のゼミナールとコロキウムがきっかけとなってヤスパース哲学研究が私の生涯の研究テーマとなったことは，殊の外感慨深い。また，主に巨大な総合図書館と哲学部哲学科のちっぽけな図書館を往復するのが，おそらくこの頃の日課であったと記憶している。

▲ 2003年ヴォルムスのヴィッサー教授宅の前で

その後，2003年の春から秋にかけて，客員研究員として再び同大学に滞在する機会に恵まれた。当初1年間の予定で，オーストリアのグラーツ大学でポパーとヤスパースの批判的理性に関する比較研究を行うことを考えていた矢先に，急遽研究期間を半年へと短縮することを強いられたためである。奇しくもこの変更のおかげで，再びマインツ大学のヴィッサー教授の下でヤスパース研究に従事することになったことは言うまでもない。この時は，客員研究員ということもあり，哲学科の図書館の片隅に専用のデスクを与えられ，月曜から金曜までほぼ毎日，好きな本を持ち込んで自由に研究に勤しむことができた。このドイツの図書館の特徴として，ギリシャ・ローマ・中世の古典や近現代のフランス・ドイツ等の著作に比べて，分析哲学や科学哲学に代表される現代英米の書籍が明らかに少ない，ということが挙げられる。さらにこの時驚いたのは，当時の哲学科の図書館には専任のスタッフが常勤しておらず，図書館の貸し出しや運営が主に大学院生（主にドクトラント）によって担われていたことである。

次に，ドイツを代表するユニークな図書館，ドイツ文献資料館（Deutsches Literaturarchiv）について，若干の個人的感想を述べさせていただく。シュトゥットガルト近郊に位置するマールバッハという小さな村に，ドイツ文献資料館はある。あるいは，この資料館は有名なシラー国立博物館に隣接しているという方が，通り

▲ マールバッハのドイツ文献資料館

がいいかもしれない。ところで，この資料館は通常の大学図書館のように自由に閲覧できる空間（ビブリオテーク）と，一般の図書館とは違って，オリジナルの書簡・資料並びに手書きの原稿・ノート等が厳重に保管・管理されている特別な空間（アルヒーフ）とに分かれており，後者では，たとえ紙切れ一枚といえども外部へ持ち出すことはできないし，自由にコピーすることも許されない。

ここでは，個人的に何度も通った文献資料館のアルヒーフ（アーカイヴ）部門について紹介させていただく。

このアルヒーフには，18世紀から現代に至るまでのいわゆるドイツ語圏の文献や思想史に関する貴重な文書・画像並びにオブジェ等が収集されており，それらの多くは原則開示可能な状態にある。さらに，自筆原稿・文書等のコレクションの中には，1，400を超える遺稿や草稿が含まれている。そこには，フリードリヒ・シラー，ライナー・マリア・リルケ，ヘルマン・ヘッセ，フランツ・カフカ，パウル・ツェラン，ペーター・ハントケ等，著名な作家たちが名を連ねている。またここには，文学者以外にも多くの学者や哲学者たちの自筆およびタイプ原稿・書簡等が保管されており，なかでも特筆すべきは，ドイツ思想史を語る上で欠かすことのできない「現象学」・「実存主義（実存哲学）」・「解釈学」に焦点が当てられていることであろう。それらを代表する哲学者の一部を，次に列挙する。マルティン・ハイデガー，ハナ・アーレント，ハンス＝ゲオルク・ガダマー，ニコライ・ハルトマン，カール・ヤスパース，ルートヴィヒ・クラーゲス，カール・レーヴィット，ヨアヒム・リッター（DLA Marbach:https://www.dla-marbach.de参照）。

この貴重な文献資料館を初めて訪れたのは2003年以前であるが，ここに足繁く通うようになったのは前述した2003年のマインツ滞在の折であり，この年の夏，シュトゥットガルト駅近くの馴染みのホテルに10日余り宿泊し，そこからSバーンで片道30分程かけてマールバッハまで通うのを日課としていた。目的は，主にカール・ヤスパースの哲学的思惟を貫く「理性とコミュニケーション（交わり）」に新たな光を当て，それが遺稿として残された「世界哲学」（Weltphilosophie）という理念へと受け継がれていることを調査することであった。膨大な資料の中からテーマや項目ごとに整然と分類されているファイルを検索し，一度にかなりの分量の，手書きないしタイプによる原稿・草稿・ノート等の開示を依頼するのだが，とりわけ初めて目にする，一見判読不能とも思える手書きの原稿やメモには，心を躍らされたものである。

幸い日本に帰国した後も，しばしばこのドイツ文献資料館を訪れる機会に恵まれ，今なお忘れられないのは，ヤスパースとアーレントとの思想的な影響に関する未公開の原稿やノート・草稿・資料等を実際に手に取り，その痕跡を直に辿り，知られざる相互の思想的連関の一端を垣間見ることができたことである。特に，いわゆる『ハナ・ブッフ』（Hannah-Buch）と呼ばれる，アーレントに関する纏まった資料，手書きのノートおよびタイプ原稿を数日間閲覧することができたことは，当時としては大変貴重な経験だったと言えるだろう。というのも，そこでヤスパースが『エルサレムのアイヒマン』をめぐるアーレントのレポートにどのようなコメントを加えていたのかを詳しく知ることができたからである。さらに，アイヒマン裁判自体に関する多くの資料をヤスパースが広範囲にわたって収集していたことも，驚きの一つであった。もっとも今年（2023年）になって，新たに編集された，全作品並びに遺稿・未発表論文を網羅した（50巻に及ぶ）ヤスパース全集のアーレントに関する遺稿が刊行されるに至り，『ハナ・ブッフ』の全容をようやく誰もが目にすることができるようになったことを付け加えなければならない。

最後に，2013年に訪れたアテネ大学の宝石のような小さな図書館の個人的な体験について簡単に触れて，このささやかな巻頭言を終えることにしたい。

2013年8月4日から10日まで，哲学発祥の地とも言われるギリシャのアテネで，5年ぶりに第23回世界哲学会議が開催された。この大会で，大講堂に溢れんばかりの聴衆を集めていたドイツの哲学者ハーバーマスの講演は大変魅力的なもので，未だに強く脳裏に焼き付いている。そこで私はヤスパースとアーレントに関する研究成果を発表したのであるが，その時の会場がアテネ大学の小さな図書館だった。これまで，古城をも含めた国内外のさまざまな場所で講演・研究発表を行ってきた経験はあるものの，後にも先にも，数多くの書籍に囲まれた図書館の一室で発表したのはこの時だけで，いまだに忘れ難い良き思い出の一つとなっている。そこは，忌憚なく意見を述べ熱く語り合うという西洋的なエートスに支配されている一方で，幾分ピリピリとした緊張感の漂う通常の発表会場とは異なる，南国特有の落ち着いた，ゆったりとした空気が流れていたからである。

▲ 2013年アテネ大学大講堂でのハーバーマスの講演

▲ アテネ大学の小さな図書館での研究発表の思い出

ESSAY

私と図書館

国際総合政策学科 教授　上田 光明

学部から現在に至るまで私と図書館のつながりはとても強いものである。時系列を追って回想したい。

根っからの勉強嫌いであった学部生時代の私にとって，図書館は当初寝るための場所であった。快適に睡眠ができる２階の個人席を確保するために開館前から並んでいたこともあった。だが，２年生の夏のある日，いつものようにその個人席で寝ようとしたが，どうも寝付けない。館内をうろついていたところ，教員著書コーナーで吉岡一男教授の『刑事学』（青林書院）（注：私は現在では犯罪や非行を社会学の立場から研究しているが，出自の学部は法学部であり，法学における犯罪研究の呼称の一つがこの刑事学である）なる妙なタイトルの書籍が私の目に留まった。手に取って読んでみると，一切理解ができない。衝撃を受け，次の学期でその教員の授業にも出てみたが，一切理解できない。でもこの先生についていけば何か素晴らしい世界が見られるかもしれない。恥ずかしながらこれが私の研究生活の原点である。３年生の時にその教員のゼミに入り，『刑事学』という学問を少しは理解できるようになり，４年生の時にはもっと勉強したいという気持ちになり，大学院に進学した。大学院に進学してからは数多くの専門書が配架してある書庫に行くようになった。教科書で学んだ海外の有名な教授の原著や，そこで引用される学術雑誌が創刊号から置いてあり，それらを見つけるたびにワクワクした。この時の私にとって図書館は，寝るための場所から，知的好奇心を満たしてくれるアミューズメントパークへと変容しており，朝から晩まで居たこともあった。そんな中，Travis Hirschi教授の『Causes of Delinquency（非行の原因）』（文化書房博文社）という本を借りて読んだ。これは社会学の観点から非行を研究したもので，そのロジックや方法論，説得力に大きな衝撃を受けた。法学に限界を感じていた私は社会学に転向することを決意し，今に至るというわけである。図書館がなければ，上の二冊にも出会うことはなく，社会学を研究することもなかっただろうし，そもそも研究の世界に進んだかどうかも疑わしい。

このように，図書館に「居た」ことで人生が大きく変わったように思う。一人でも多くの学生諸君に図書館でこのような出会いがあればと願う。睡眠や涼みといった非学術的な目的であっても良い。とりあえず図書館に行こう！そこで何か素晴らしい世界が見られるかもしれない！

ESSAY

本を読むこと

ビジネス教養学科 教授　永田 美江子

本を読むことは知識を得ることがその目的のひとつですが，自分自身の想像の翼を広げる練習のような気もします。小説，エッセイ，専門書など本には易しいものから難しいものまでさまざまですが，例えば，冒険ものや歴史小説，ミステリーなど，その本を読むことによって，活字の場面が頭の中にイメージとして湧き上がってきませんか。あるときは，主人公を応援したり，あるときは敵役の気持ちを感じてみたり，現実の世界にはない空想の世界に遊ぶような時間です。

最近はインターネットで検索すると，なんでも答えが出てきて，ChatGPTのような人間の発話に対して，AIが答えを返してくれて対話ができる，そんなサービスも話題になっています。もちろん，現代を生き抜く人間として新しいものを取り入れていく必要はありますが，図書館などで書棚にある本のタイトルをみて，手に取り中身をぱらぱらと見ていく。そして，引き込まれるように読んでいく。逆に，タイトルに惹かれて読みはじめてみたものの，思っていた内容とは違い，「あっ，失敗した」と感じるようなものもあります。それも経験のうちと考えるのですが，「上手にタイトルがついているな」とか「ベストセラー本は，中身も大事だけどタイトルも大事なんだ」と自分勝手なひとりごとを心の中でつぶやいてみたりします。

そういえば，博士論文に四苦八苦していた大学院生の頃，指導教官から，『本を読む本』（講談社学術文庫）を勧められ，読んだことがあります。その本の感想はさておき，「本を読むために本を読むのか，本を読むことは奥深い行為なのだな」と感じました。そして「私って，軽めの本を読むことが多いな，論文のためにはもっと専門書を読まなければ」と一念発起しました。しかし，指導教官に言われたように，本を読んで要約をして読書ノートをつける，その地道な作業が本当に大変でした。最初は手書きで読書ノートを書いていましたが，「手書きはもう無理」と挫折して，パソコンで読書ノートをつけはじめました。昔の人はすべて手書きだったんだなとパソコンの存在のありがたみを感じました。指導教官の教えのとおり，読書ノートは結果としては，論文を書くことにつながり，空想の世界でふわふわしているだけが，本を読むことではないのだと実感しました。

当時の読書ノートを読み返すと「要約が間違ってる・・・」と恥ずかしい気持ちになります。でも本を読むことは，自分自身の未来への道しるべでもあると思うのです。

● FACULTY PUBLICATIONS

本学部教員の刊行物紹介

冷戦とアイゼンハワー政権の宇宙政策

永井 雄一郎 著　[日本評論社]

世界初の人工衛星スプートニクの打ち上げから半世紀以上が経過し，宇宙活動は世界的にも目覚ましく進展した。現在では，多くの国々が人工衛星を保有し，さまざまな目的で宇宙空間を利用している。宇宙空間の平和利用の進展は，人類社会に多くの恩恵をもたらしてきた。一方，宇宙空間は国家の安全保障にとっても欠かせない場所として軍事的にも利用されてきた。近年では，宇宙空間をめぐる軍事競争も見られるようになっている。今や宇宙空間は国際関係の舞台となり，その秩序のあり方が問われている。

本書は，こうした宇宙空間を舞台とする国際関係の歴史的淵源（えんげん）を探ることを目的に，ドワイト・アイゼンハワー政権期の米国の宇宙政策を検討し，この時代に米ソ対立の舞台が宇宙空間へと広がりを見せていく過程を描いている。アイゼンハワー政権の時代は，米国における宇宙政策の萌芽期であった。アイゼンハワー政権は，ソ連との冷戦を闘い抜くために不可欠な領域として宇宙空間を捉え，軍事利用と平和利用の両面において米国の宇宙政策とその実施体制の基礎を築いていったのである。それは宇宙空間が国際関係の舞台となっていく時代の始まりでもあった。

テレビジョンの文化史

日米は「魔法の箱」にどんな夢を見たのか

小代 有希子 著　[明石書店]

テレビのアイデアは，世界をつなぐ「魔法の箱」として19世紀末に生まれた。日米のエンジニアは戦前からテレビ開発で協力し，戦後両国は，世界で最初にカラーテレビ放送を始め，1964年東京オリンピックでも，世界初のカラー衛星中継に成功。日米は世界の二大テレビ大国となった。高品質な日本製テレビは，アメリカの消費者に歓迎され，日本製ビデオカセットレコーダーも両国で大ヒットした。しかしテレビ文化は，両国が共に創り出したグローバル文化としては育たなかった。両国政府にとってテレビは，冷戦プロパガンダの手段または輸出戦略物資でしかなかった。アメリカのテレビに登場する日本人は，でたらめのサムライと芸者ばかり。日本が輸入するアメリカ製番組も安っぽいものが多かった。テレビのテクノロジーは地球の反対側の姿を映し出せるようになったが，それだけでは「魔法の箱」にはならない。相手に近づきたいと思う気持ちが双方にあってはじめて魔力を発揮し，グローバル文化の創出につながる。21世紀の今，身の回りのテクノロジーをふり返って，グローバル文化の可能性について考えてみて欲しい。

UNDP ガバナンスの変容

ラテンアメリカにおける現地化政策の実践から

真嶋 麻子 著　[国際書院]

本書は，2022年に提出した博士論文に加筆修正して上梓したものである。国連は何のために存在しているのか，貧困や暴力に苦しむ人たちに対してどんな未来を示すことができるのか…という素朴な関心から国際機構論の世界に足を踏み入れ，国連開発計画（UNDP）を研究対象として，発展途上国の視点で国連組織を意義づけることを試みてきた。国連組織の内部文書を用いて組織そのものを理解することに注力した他，地域研究―本書の場合にはラテンアメリカ地域研究―の成果との往復作用のなかで国連組織を理解するというこれまで頻繁には用いられてこなかった方法も用いてきた。

本書の前半では，UNDP が発展途上国からさまざまな資源を取り入れて業務を実施する現地化政策の制度化の過程をたどり，後半では，現地化政策がどのように実践されてきたのかについて，軍政期のチリ，軍政から民政への移行期のアルゼンチン，内戦と復興期のグァテマラの事例を取り上げて分析した。発展途上国の政治や社会と格闘しながら開発支援業務を実施してきた様子が浮き彫りになったと思う。昨今の国連安保理の不甲斐なさを前に，「国連に存在意義はあるのか？」と感じることも多いが，本書を通じて，国連の別の顔を見せることができたとすれば幸いである。

源氏物語夢見論

笹生 美貴子 著　[文学通信]

物語は虚構（フィクション）を語ることで人々の心を魅了し，作品の奥深くへと誘ってゆく。虚構を語ることで構成される物語の内部には，当時の人々の欲望や深層心理が色濃く反映されている。それがどのように物語に表されているのか。古代人は，夢にどのような価値観を抱き，それがどのように物語化されてゆくのか。本書では，そうした物語なりの夢の特性を明らかにした。

考察にあたり，不可思議な夢の多く描かれる『源氏物語』を中心としつつ，当該作品に影響を与えた可能性の高い物語・漢籍・古記録・日記などに描かれる夢の記述にまで範囲を広げ，分析を試みた。

また，中国語訳『源氏物語』の翻訳方法についても扱った。古代日本の夢観は，古代中国の影響を強く受けている。『源氏物語』の夢描写には，「明石」巻で描かれる夢など，伝奇小説の影響を受けたものも見られる。

このように，古代日本の夢観に影響を与えた側の言語（中国語）で翻訳された『源氏物語』の不可思議な夢描写やその注釈部分には，時に，日本の古注釈や現代注釈にも劣らない解釈が提示されているケースのある点も，本書にて指摘している。

所蔵資料紹介

アダム・スミス『諸国民の富』

初版,「ロンドン版」

国際総合政策学科 特任教授　大淵 三洋

1790年７月17日，アダム・スミス（Adam Smith）は，彼の生涯の友ディビッド・ヒューム（David Hume）と同じ腸の疾患により，67歳で鬼籍の人となった。スミスの亡骸は，エジンバラの自宅に近いキャノン・ゲートのチャーチャード（Churchyard）の教会に葬られた。1998年12月，本稿筆者はスミスの墓を訪れたが，その墓碑には，名前に続き,the author of the Theory of the Moral Sentiments and Wealth of Nations とはっきりと刻まれていた。多くの研究者は，前者を『道徳感情論』と訳し，後者を『諸国民の富』としている。スミスは生涯を通じて，この２冊の著書しか公刊していない。筆者は，後者を中心にして，蔵書を紹介したいと愚考する。

『諸国民の富』は，英文題 An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, London,1776. 原題は『諸国民の富の性質および諸原因に関する一考察』である。筆者は，この偉大なる著作ですら，スミスにとっては，一考察であった事に深く感銘している。『諸国民の富』は，それまで哲学の一分野として扱われていなかった経済的課題を，体系的に論じた最初の経済学の著作である。

スミスは，グラスゴー大学で哲学者ハッチソン（F.Hutcheson）に学び，その道徳哲学から多大な影響を受けた。その後，グラスゴー大学の教師を経て，バックルー公（Henry Scott,3rd Duke of Buccleuch）の家庭教師となり，1764年には彼と共にフランスに渡り，ケネー（F.Quesnay）を指導者とする重農主義（Physiocracy）から大きな影響を受けている。帰国後，スミスは郷里に帰り，バックルー公からの年金を享受しながら，約９年間で経済学上最大の古典とされる本書を完成させたのである。

スミスが52歳の時に公刊された『諸国民の富』は，1776年３月９日にロンドンにおいて，初版 500部（一説には1, 000部）が売り出された。１セット2巻本からなる真正の初版本であり，価格は1ポンド16シリングであった。当時の平均的労働者の20日分の賃金に相当する高額であったが，僅か半年で売り切れたとされる。これが，日本大学図書館国際関係学部分館が所蔵する『諸国民の富』初版，「ロンドン版」である。出版地，出版者及び出版年を同一としながら，頁数その他に違いがある初版本と，それとは別に，第２巻のタイトル頁及びその奥付が異なる「エジンバラ版」が存在している。また，ロンドン版が公刊された1776年に，「ダブリン版」なる不正版が出版されている。スミスは，その後も1790年に65歳で逝去する直前まで，『諸国民の富』の改訂を継続し，第５版まで出版している。日本では明治初頭，石川瑛作などによって翻訳され，経済的自由主義の古典として受け入れられた。

５つの編からなる『諸国民の富』は，「あらゆる国民の年々の労働は，国民が年々消費する生活の必需品と便益品のすべてを供給するみなもとであって，この必需品と便益品は，つねに，労働の直接の生産物であるか，またはその生産物で他の国民から購入したものである」という有名な言葉から始まる。スミスは，生活の必需品と便益品の豊かさが，すなわち諸国民の富であり，労働がその源泉である事から，すべての価値は労働から生まれるとする見解を展開する。いわゆる労働価値説である。スミス以前の重商主義（Mercantilism）が支配していた時代には，国家や国民の豊かさは，金銀の獲得と貨幣の蓄積にあるとされ，それは，貿易差額によってのみ得られると考えられていた。それゆえ，当時のイギリスでは，広範な植民地の軍事的支配を基礎とした保護貿易政策を採用し，独占的な統制経済を築き上げていた。スミスは，それを厳しく批判し，最も自然にかつ最も早く国を豊かにするには，個人の利己心による自由な経済活動を放任し，見えざる手（an invisible hand）に委ねる事が望ましいと自説を展開する。

『諸国民の富』の構成は，全５編32章からなる。第１編は，労働生産力増進と諸階級への分配について，第２編は再生産と資本蓄積についてであり，以上２編が経済理論の部分である。第３編は経済史であり，第４編は経済学説あるいは経済政策を論じている。特に，第４編は重商主義の批判の部分として知られ，その紙幅は『諸国民の富』全体の約３分の１を占めている。そして，最後の第５編が，筆者の研究領域の財政学である。スミスは，経済学の創始者であると同時に，財政学の基礎を構築した類稀なる人物であったといえよう。

『諸国民の富』におけるスミスの論理は，分配の分野におけるサー・トーマス・ロバート・マルサス（Sir Thomas Robert Malthus）の業績と表裏一体をなしつつ，リカードによる資本主義経済学の確立へと導かれ，イギリス正統派経済学大成の重要な役割を担ったのである。本書の稀覯本としての価値は，益々高まっていると推考される。

▲『諸国民の富』背表紙

教員による推薦図書紹介

●RECOMMENDED BOOKS

弱いロボット

岡田美智男 著　[医学書院]

国際総合政策学科 准教授　**舩橋 瑞貴**

皆さんは「ロボット」にどのようなイメージを持っているでしょうか。家具に接触することなく，せっせと掃除をしてくれるお掃除ロボット。デートプランに迷えば，即座にベストな提案をしてくれる今話題のチャットボットでしょうか。人口知能（AI）の存在が知れ渡り，それと連動するロボティクスは，あらゆる業種に「第4次産業革命」と称されるパラダイムシフトをもたらしています。

「近い将来，AIロボットが人類を凌駕する」と囁かれる現在において，本書のタイトル『弱いロボット』はなんとも理解不能です。本書に登場するロボットの一つを紹介すると，ごみの近くに行きモゾモゾするだけで，ごみを拾うことのできないごみ箱ロボットです。まさに「弱い」半人前のロボットなのですが，周囲にいる人たちが「仕方ないね，手伝ってあげる」と言わんばかりにごみを拾い，結果，ロボットは見事に役目を遂行します。ここには，敢えて「弱さ」をさらけ出すことで，周囲の「優しさ」や「できること」，つまりは「強さ」を引き出し，「弱さ」と「強さ」が組み合わさる協力体制が構築されるのです。

本書は，かつて自動販売機から聞こえた「アリガトウ，ゴザイマシタ」が，私たちにお礼の言葉として響くことはなかったという事実が，不自然さの残る合成音声によるものだったため，という見かけ上の問題ではなかったことを気づかせてくれます。

私たちは，ロボットも含む他者との関係性の中で生きています。著者が生み出すヨタヨタ，トボトボと動く愛らしい「弱い」ロボットは，本書を手にとった皆さんに，大方の予想を小気味よく裏切りながら他者とのコミュニケーションのあり方，共生の本質をみせてくれるはずです。

観光のまなざし（増補改訂版）叢書・ウニベルシタス 1014

ジョン・アーリ，ヨーナス・ラースン 著 / 加太宏邦 訳　[法政大学出版局]

国際総合政策学科 准教授　**矢嶋 敏朗**

観光学の名著が，世界状況の変化に合わせ9年前の2014年に増補改訂されました。改訂前より著者アーリらは，観光とは，日常から離れた景色・風景・町並みなどに対して「まなざし」を投げかけることとしていました。まなざしとは，哲学用語で簡単にいうと「見ること」「見られること」を指します。これらのことから，アーリによると観光行為は，それ自体では存在せず，社会や文化や人間との関係で創り出されるとされています。

増補改訂版では，昨今の世界情勢を鑑みた内容が加わりました。観光のまなざしと「写真」「デジタル化」との関係，観光理論や研究における身体的「パフォーマンス」の分析，地球温暖化や石油ピークなどグローバル化する観光のまなざしにとっての望ましい状況や未来を問う観光における「リスク」の諸相，これらを新たに加えた3章で述べています。哲学者フーコーの「まなざし」の概念を手がかりに，歴史的・経済的・文化的・視覚的レベルにおいて観光を素材として読み解いているのです。

具体的内容は，第一章：観光理論，第二章：大衆観光，第三章：経済，第四章：労働とまなざし，第五章：観光文化の変容，第六章：場と建築物とデザイン，第七章：見ることと写真，第八章：パフォーマンス，第九章：リスクと未来，このように時代を意識したものです。

オンライントラベルエージェント急増，新型コロナ（疫病）の流行，温暖化による異常気象，テロリズムの台頭などをきっかけに世界の観光はパラダイムシフトを迎えています。このような時期だからこそ観光の原理原則を立ち止まって考えてみてください。特に，旅行関連産業をはじめ，公務員として地域の観光行政に携わりたい方にも必読の書です。

あらすじで読むシェイクスピア全作品

河合祥一郎 著　[祥伝社 祥伝社新書]

国際教養学科 教授　**松本 美千代**

あらすじを読んだだけで，シェイクスピアがわかるようになる！著者のお約束通り，本書はシェイクスピアの詩篇を含む，戯曲全40作について解説した意欲作である。読者にとっては現代人の心のサプリとして面白い作品である上に，一冊で教養人を誇れてしまうという大変お得で便利な読み物である。

一度は耳にしたことのある「生きるべきか死ぬべきかそれが問題だ」「おお，ロミオ，ロミオ，あなたはなぜロミオなの」といったセリフには，いろいろな事情が隠れている。その事情について本書は，シェイクスピアに馴染みがなくてもコンパクトに物語の奥深い背景を説明してくれる。最先端の論文に基づいた分析も見事ながら，そうした事情を踏まえて読むことで，名セリフの数々をより深く堪能することができる。400年以上の歳月を経たシェイクスピアの物語であるが，物語が扱う人間関係，政治学，恋の心理的駆け引きなどは，今も迷える現代の私たちに生きる力を与えてくれる。

禁じられた恋に燃え上がるロミオとジュリエット，亡き父の幽霊に命ぜられ復讐にうろたえるハムレット，魔女の言葉に野心を揺さぶられ上司を葬る大将マクベス。ここに名前を挙げた登場人物たちは鬱になったり，キザなセリフで決めてみたり，嫉妬や欲により国王でも選択を誤り，家族や自身を破壊する。

シェイクスピアは，詩人としても英文学史に名を遺したと言われる。簡単ではない人生に葛藤しながら導き出す彼らの決断や吐露する言葉の背景には，たくさんのドラマと人生の本質が詰まっている。どこからでも読み始めることができるのも魅力である。まずは名セリフから，そのドラマティックな世界の扉を開いてみてはいかがであろう。

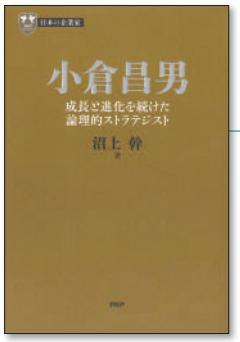
歴史　日中文化交流史叢書[1]

大庭脩，王暁秋 編　[大修館書店]

国際教養学科 助教　柳 宇星

古代から現代に至るまで，日本と中国の文化交流はどのようなもので，それぞれの時代にどのような影響を与え合ってきたのか，漠然としたイメージを持っている人も多いのではないでしょうか。日中両国の文化交流史に興味がある方は，ぜひ『日中文化交流史叢書［1］歴史』（大庭脩，王暁秋編）を読んでみてください。本書では，二千年以上にわたる日中両国の友好交流の歴史が，非常に完全かつ明確に記述されています。本書では日中間の文化交流の歴史を，秦漢から隋唐時代，中世宋元明時代，近世清時代，近代，現代に明確に時代区分されています。更に特筆すべきは，本書が日本の研究者と中国の研究者それぞれ異なる視点から，非常に客観的に両国の文化交流の特徴と時代の区分を示していることです。

本書で最も印象に残ったのは，「漢字の読み方の問題」と「漢字の伝来の問題」の節です。日本においては，平安初期から独自の訓点を付け，中国語の原典をそのまま日本語に置きかえて訳し，更に，漢字の一部を用いて片仮名，平仮名など独自の文字を作り出しました。これらは，まさに古代の人々の知恵であると言えます。現在中国語を習得しようとする外国人を最も悩ませている漢字は，日本人学習者にとっては全く問題ではありません。当然，日本語や中国語の学習は，ただ単に漢字を学ぶことではありませんが，私たちにとって中国語ほど親近感を感じる外国語は他にないと言っても過言ではないでしょう。漢字を通じ，その背景にある両国の長年の友好関係を理解することにより，私たちはより一層興味と強い学習意欲を掻き立てられるのです。



小倉昌男　成長と進化を続けた論理的ストラテジスト

沼上幹 著　[PHP研究所]

ビジネス教養学科 助教　藤谷 裕子

近年のインターネットの発展にともないE-コマースの市場規模が拡大し，個人宅配が増大している。消費者は，E-コマースにより小売店へ出向くことなく，好きな場所で好きな時間に買い物を楽しむことができるようになった。E-コマースで購入した商品を消費者の元へ届けるために宅配が行われ，宅配会社の取扱荷物量が増えている。

本書は，大和運輸株式会社（現在のヤマト運輸株式会社）創業者の次男として1924年に生まれた小倉昌男の生い立ちから経営者としての手腕，伸び悩む業績から脱却するきっかけとなった宅急便を生み出す過程，小倉昌男の戦略思考力，人間像について述べている。その際，結核に罹患したり，社長就任直後に利益率が低迷していたり，オイルショックの影響を受けるなど，順風満帆だったわけではないことにも言及している。

さらに本書は，小倉昌男が２つのイノベーションを成し遂げたことを記している。日本初の宅配便ビジネスである宅急便を立ちあげたことと，障がい者の支援の領域に経営というコンセプトを持ち込んだことである。宅急便に主な焦点が当てられているが，もう一方のイノベーションである福祉の世界に経営という考え方を持ち込み，障がい者に自立できる賃金を支払うようにしようという考え方は画期的であった。

ヤマト運輸は，既存の郵便小包と国鉄小荷物の市場を取るのではなく，新たに宅配便という市場を生み出したのである。スキー宅急便やクール宅急便は，あったら便利だけれども今までなかったという消費者の潜在的なニーズを満たす画期的な商品であった。

経営学やマーケティングに関心のある人に是非読んでいただきたい一冊である。

統計学が最強の学問である　データ社会を生き抜くための武器と教養

西内啓 著　[ダイヤモンド社]

食物栄養学科 准教授　石川 元康

「エビデンス」って聞いたことがありますか？また，最近では，「AI」や「ビッグデータ」という言葉を耳にしたりしませんか？「エビデンス」は「根拠，証拠」という日本語に訳せます。大量の情報が飛び交っている中で，信頼性の高い情報の判別，意味のある情報の抽出，データを有効活用するためには，エビデンスの理解や統計学の知識が不可欠となってきています。

デジタル時代の「読み・書き・そろばん」に相当する「数理・データサイエンス・AI」の基礎に必要な力を全ての国民が育み，あらゆる分野で人材が活躍する環境を構築する必要性から，政府は「AI戦略2019」を掲げ，全ての大学・短大・高専学生が「数理・データサイエンス・AI」のリテラシーレベルを習得するという目標を設定しています。しかし，多くの学生にとっては数学，統計への苦手意識があることや，必要性・重要性が実感できずにいるのが現状です。

本書は，統計学の基本的な概念から始まり，データ解析や統計的手法の応用に至るまで，幅広い内容を網羅しています。数多くの実例を交えながら，統計学が私たちの日常生活からビジネスの意思決定に至るまで，様々な分野で不可欠な役割を果たしていることを示しています。また，統計学の理論的な内容は，分かり易いように複雑な数式を避け，グラフや図を活用して直感的に説明しています。さらに，批判的思考を養う上で，データの信頼性や背景についての重要性を強調しています。

多くの学生にとっては敬遠されがちな分野ですが，本書を読むことで日常生活や仕事で直面する情報を適切に評価し，客観的な意思決定を行うためのスキルが身に付くと思います。是非この本で「エビデンス」の本質について考えてみてください。

STUDENT'S VOICE

図書館での出会い

国際総合政策学科 4年　江上 陽太

初めて大学の図書館を訪れた日,それは1年時の初めてのテスト期間中に,期末レポートの参考文献を探しに来たときだった。その日以来私は,図書館に通っている。当時は全面オンライン授業で友人もほとんどいなかったため,毎日1人で図書館に通っていた。「いた。」というか,今もほとんど1人で図書館にいる。この文章も1人,図書館で書いている。だがひとりぼっちという寂しさはない。図書館に行くといつも,職員の皆さんが温かく迎えてくださるのだ。毎日お話しする訳ではないけれど,時々声を掛けてくださり,私の就職先が決まったときも,とても喜んでくださった。図書館は私にとって,最も居心地の良い場所のひとつだ。

また私は図書館で,大学で最も心を許せる友人とも出会った。元々彼は,私と同じく毎日図書館に通っていたため,互いに認識はしているという状態だったが,ひょんなことから一緒に夕飯を食べに行き,以来,就職活動などでも共に頑張り抜く仲となった。そして彼以外にも,図書館にはさまざまな人がいた。毎日決まった席に座り資格の勉強に励んでいた学生や,公務員試験の勉強に夜,学校が閉まるまで励んでいた学生など,毎日見かける人が何人もいた。彼らと話したことはなかったが,彼らがいたからこそ,私も負けないようにと大学の課題や就職活動などを頑張ることができた。

このように私は図書館で色々な人に出会ったが,それは本も然りだ。私は小学生の頃は本が好きで,休み時間を読書で過ごすことも珍しくなかったが,中学生頃から忙しくなり,あまり本を読まなくなった。高校時代に図書館に入ったのは掃除の時間くらいだろう。そういう私だが,大学の図書館で何気なく小説を読んだときは,小説の世界に入り込んで楽しむだけでなく,自分や社会について考えさせられるなど,昔とは違う形でも小説を味わうことができた。久し振りの読書にはどこか懐かしさも覚えたが,本を読まない期間での自身の成長も,少し感じられたのだ。

そして4年生である今,私は用が無くてもとりあえず図書館に行くこともある。図書館には色々な人がいるが,皆さんそれぞれに好きなポイントがあるのだろう。大学4年間,図書館に来ないのはもったいないと思う。本はもちろん勉強スペースも沢山あるし,温かい職員の皆さんや,様々な利用者がいる。素敵な環境だ。

再来年には図書館が新しくなると聞いた。私が卒業した後,どんな人達が集まりどのように図書館を利用するのか楽しみだ。皆さんもぜひ図書館に足を運び,自分なりの楽しみ方を見つけてみてはどうだろうか。きっと何かに出会える,私はそう思う。

国際機関資料室から　● INTERNATIONAL DOCUMENTATION CENTER

日・EUフレンドシップウィーク2023「魅惑の国クロアチア」開催

EU情報センターを設置する国際機関資料室では，毎年5月9日のヨーロッパ・デーを記念して，日本とEUの交流を目的とするイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

今年は，5月9日(火)～9月30日(土)まで，図書館1階閲覧室にて，「魅惑の国クロアチア」と題した展示会を行いました。メインパネルにはクロアチアの写真ポスター12枚を展示し，アドリア海に面した美しい街並みと風景で閲覧室1階を華やかに彩りました。また，今年度クロアチアをテーマに決めた理由となったユーロ導入（2023年1月1日より）に関する説明や基礎知識，言語，食事，サッカーなどを紹介展示しました。さらに，ユーロの導入と同時に，EU加盟国を中心に人とモノの移動の自由を定めたシェンゲン協定にクロアチアが参加した事から，シェンゲン協定にも触れることで，今後ヨーロッパを訪問する機会がある学生に対し，貴重な情報を提供できたと思います。

恒例のクイズでは，クロアチアに関する展示内容から出題し，正解者には記念品として駐日欧州連合代表部から提供されたポロシャツや筆記用具などのEUグッズを進呈しました。今後も学生を始めとする来館者がEUや加盟国についてより興味をもっていただけるようなイベントを企画していく予定です。

図書館ニュース
BIBLIOTHECA
第19号
通巻第164号
発　行　日／2023年11月1日
編集・発行／日本大学国際関係学部
図書委員会
https://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/